

新入生向けのキャンプ実習が社会人基礎力に及ぼす影響

The impact of the orientation camp for new students on the development of fundamental skills for working adults

体育学部競技スポーツ科学科 田中 耕作 TANAKA, Kosaku Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education	体育学部競技スポーツ科学科 宮本 彩 MIYAMOTO, Aya Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education
体育学部競技スポーツ科学科 佐々木史之 SASAKI, Fumiyuki Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education	体育学部競技スポーツ科学科 前田 誠一 MAEDA, Seiichi Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education
体育学部競技スポーツ科学科 江波戸智希 EBATO, Tomoki Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education	体育学部競技スポーツ科学科 明石 啓太 AKASHI, Keita Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education
体育学部競技スポーツ科学科 保科 圭汰 HOSHINA, Keita Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education	体育学部競技スポーツ科学科 品田 直宏 SHINADA, Naohiro Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education
体育学部競技スポーツ科学科 吉岡 利貢 YOSHIOKA, Toshitugu Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education	体育学部競技スポーツ科学科 矢野 智彦 YANO, Tomohiko Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education
	体育学部競技スポーツ科学科 三浦 孝仁 MIURA, Koji Department of Sports Sciences Faculty of Physical Education

要旨：本研究の目的は、新入生オリエンテーション内で実施したキャンプ実習が社会人基礎力に及ぼす影響を明らかにすることである。調査対象は、体育学部競技スポーツ科学科の1年生であり、113名の回答を得た。調査内容は、実習前後において社会人基礎力（36項目の質問からなる尺度）を評価

した。その結果、36項目中34項目において事前調査よりも事後調査で高値を示し、25項目で有意差が認められた。その一方、「実行力」や「規律性」は事前調査の時点で高値であったことから、実習前後で有意な差は認められなかった。本研究の結果から、入学時点で高い社会人基礎力を有している学生においても、心理的負荷の高い状況であれば短期間のキャンプ実習でも社会人基礎力を向上することがわかった。

Abstract : The purpose of this study is to clarify the effects of a camp practicum conducted within the new student orientation on the development of fundamental competencies for working adults. The study targeted first-year students in the Department of Competitive Sports Science at the Faculty of Physical Education, with 113 responses obtained. The content of the survey involved evaluating fundamental competencies for working adults (using a scale consisting of 36 questions) before and after the practicum. The results showed that 34 of 36 items were higher in the post-survey than in the pre-survey, and significant differences were found in 25 items. On the other hand, "Execution ability" and "Discipline" were high at the time of the pre-survey, and no significant differences were found before and after the practical training. The results of this study show that even students who have high fundamental competencies for working adults at the time of admission can improve their competencies even during a short period of camp training if they are in a situation with high psychological load.

キーワード : キャンプ実習, 短期間, 社会人基礎力, 大学新入生

Keywords : Camp practicum, short-term, fundamental skills for working adults, freshman student

1. 緒言

大学への適応を促進するため、各大学において様々な取り組みや支援が実施されている。本学においても、入学直後の新入生オリエンテーションにおける教育内容の充実を図ってきた。その中で、今年度から新設された競技スポーツ科学科では、学生間ならびに学生と教員間の信頼関係の早期構築を図るとともに、学生自身に主体的に学ぶ意欲の醸成をめざしてキャンプ実習を実施することとした。

キャンプ実習による教育効果は多岐にわたるが、本研究では社会人基礎力に着目し、教育プログラムの評価を行った。社会人基礎力とは、2006年に経済産業省によって提唱されたもので、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされている（経済産業省ホームページ、2024年8月28日アクセス）。従来であれば、社会人基礎力は家庭や地域社会の中で自然と培われてきたものであるが、集団活動への参加の機会が減ることにより、自然な獲得というのが難しくなっていることが指摘されており、大学教育における社会人基礎力の育成が強く求められる傾向にある（大村ら、2018）。

いくつかの先行研究において、キャンプ実習や自然

体験活動によって社会人基礎力やコミュニケーションスキルの向上が報告されている（築山ら、2008；青木ら、2012；徳田ら、2017）。しかしながら、先行研究では一般学生を対象にしたものがほとんどである。また、受講学生同士が既に顔見知りであったり、人間関係ができていたりと対人関係的に大きな負荷にならず、新たな人間関係を創るために自分から積極的に働きかける機会もほとんどなかったという課題も指摘されている（青木ら、2012）。林ら（2020）の研究をみても、実施時期が8月であることから、受講学生が既に大学生活に慣れている状態で実施していると推察できる。そこで、本研究では、新入生オリエンテーション内で実施した1泊2日のキャンプ実習が社会人基礎力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 キャンプ実習の概要

本研究のキャンプ実習は、岡山市立少年自然の家にて4月4日から4月5日の1泊2日で行った。少人数のグループ活動を中心とする自然体験型のプログラムを行った（詳細は表1を参照）。本実習を通して、野外活動や共同生活に対する理解を深め、人間関係づくりを行っていく。また、様々なアクティビティを実施し、キャンプにおける実践力を身に付けると共に他

者とのコミュニケーションを取り、自己および他者理解につなげていくことを目的とした。さらに、リーダー（フォロアー）シップ、協調性、社会性等の非認知能力の涵養を図り、大学生として備えておくべき資質と知識を実践的に身に付けていくことをめざすものであった。

表1. キャンプ実習の日程・日課

時間	内容	場所
8:30	大学集合 出欠・体調確認	
9:00	大学出発	
10:00	自然の家到着	
10:15 ～ 11:00	開講式 開式のあいさつ 自然の家オリエンテーション、施設説明 引率教員紹介等	体育集会室
11:00～ 12:00	昼食 食堂(施設提供)	
12:00～ 13:00	アイスブレイク 相互理解を目的としたゲーム(ワオブロック)	フレイホール
13:00～ 15:30	アウトドアスポーツ活動① ・ネイチャーワーク ※8-10名/班で実施	ハイキングコース
16:00 ～17:00	ミーティング グループでのふりかえり・全体ミーティングを含む	
17:00～ 18:00	夕食 食堂(施設提供)	
18:00～ 19:30	アウトドアスポーツ活動② ナイトハイク or キャンプファイヤー ※8-10名/班で実施	ハイキングコース
19:30～ 22:00	入浴・自由交歓 入浴順・時間によって入浴	大浴場
22:30	消燈	

2日目

時間	内容	場所
6:00	起床	
6:00～ 6:30	洗面・身支度 体調確認	
7:00～ 7:30	清掃 各部屋の清掃、施設内使用場所の清掃	
7:30～ 8:30	荷物移動・朝食 食堂(施設提供)	
8:40～	管理棟宿泊部屋の点検	
8:40～ 12:30	野外炊事 薪(燃料)の収集～カレーライス調理～片付け	
12:30～ 13:00	開講式 開式のあいさつ 諸連絡	体育集会室
13:00～ 14:00	実習地出発 バス乗車時に点呼・体調確認	
14:00～ 16:00	事後指導 キャンプ実習の振り返りと今後の大学生活について	大学
17:00	大学到着・解散	

2.2 対象

対象者は、2024年度フレッシュマンキャンプ（キャンプ実習）を受講した本学競技スポーツ科学科1年生の113名であった。

2.3 調査内容

社会人基礎力の評価として、北島ら（2011）が作成した36項目の質問を使用した。これは、経済産業省が提示しているプログレスシート36項目を参考に板嶋らが独自に作成したもので、他の研究（林ら、2020）に

においても同様に使用されていることから本研究でも採用した。評価は「1. まったくあてはまらない」から「6. とてもよくあてはまる」までの6段階リッカート尺度を用いた。なお、性別、過去のキャンプ経験の有無ならびに経験回数についても尋ねた。

キャンプ実習での効果を検証するため、事前と事後の二度にわたりゲーグルフォームによる回答を求めた。事前調査（Pre）はキャンプ実習前日に行った事前オリエンテーションの時間に行った。他方、事後調査（Post）は現地でのキャンプ実習を終えた後に実施した。

2.4 分析方法

マン・ホイットニーU検定を用いて事前調査と事後調査の平均値の比較を行った。なお、有意水準は5%で統計学的有意と判断し、データ分析にはSPSS Statistics 21を用いた。

3. 結果および考察

対象者の特徴を表2に示した。参加者の性別の割合は、男性が65.5%、女性が34.5%であった。また、これまでのキャンプ経験の回数は、「1回」が最も多く37.2%であり、次いで「2回～3回」が31%、「経験なし」が23%であった。対象者の中には、4回以上と回答した者もいたが、9割以上の学生が3回未満であった。このことから、本研究の対象者はキャンプ経験の少ない者が大半であったと考える。

表2. 対象者の特徴

性別	男性	65.5
	女性	34.5
	なし	23.0
	1回	37.2
過去のキャンプ 経験回数	2回～3回	31.0
	4回～5回	5.3
	6回～9回	0.9
	10回以上	2.7

(%)

キャンプ実習の前後で実施した社会人基礎力の結果を比較すると、36項目中34項目において事前調査よりも事後調査で高値を示し、25項目で有意差が認められた（表3参照）。このことから、本研究で行った1泊2日のキャンプ実習においても社会人基礎力が向上したといえる。1泊2日という短期間のプログラムでも向上が認められた要因として、新入生オリエンテーション内で実施したことが挙げられるだろう。社会人

表3. 社会人基礎力の自己評価

12能力要素	項目	実習前		実習後		P
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
主体性	1. グループの取り組みで、自分の役割はなにかを見極めている	4.46	0.94	4.81	0.87	***
	2. 困難なことでも自分の強みを生かして取り組んでいる	4.56	0.83	4.87	0.82	***
	3. 自分の役割や課題に対して自発的・自律的にこうしている	4.56	0.76	4.78	0.87	*
働きかけ力	4. メンバーの協力をえるために、協力の必要性や目的を伝えている	4.41	0.85	4.72	0.98	***
	5. 状況に応じて効果的な協力を得るために、様々な手段を活用している	4.30	0.80	4.71	0.85	***
	6. グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働きかけている	4.35	0.83	4.73	0.94	***
実行力	7. 目標達成に向かって粘り強く取り組み続けている	5.00	0.76	4.99	0.84	n.s.
	8. とにかくやってみようとする果敢さを持って課題に取り組んでいる	4.90	0.89	5.00	0.84	n.s.
	9. 困難な状況から逃げずに目標に向かって取り組み続けている	4.81	0.90	4.96	0.86	n.s.
課題発見力	10. 目標達成のために、現段階での課題を的確に把握している	4.61	0.82	4.83	0.88	*
	11. 現状を正しく認識するための、情報収集や分析をしている	4.29	0.77	4.70	0.88	***
	12. 課題を明らかにするために他者の意見を積極的に求めている	4.63	0.83	4.78	0.87	n.s.
計画力	13. 目標達成までのプロセスを明確化し、実現性の高い計画を立てている	4.26	0.89	4.71	0.87	***
	14. 目標達成までの計画と、実際の進み具合の違いに留意している	4.34	0.85	4.65	0.90	***
	15. 計画の進み具合や不足の事態にあわせて柔軟に計画を修正している	4.24	0.80	4.65	0.90	***
創造力	16. 複数のもの・考え方・技術などを組み合わせ、新しいものを作り出している	4.01	0.95	4.60	0.95	***
	17. 従来の常識や、発想を転換し新しいものや解決策を作り出している	4.15	0.94	4.63	0.97	***
	18. 目標達成を意識し、新しいものを生み出すためのヒントを探している	4.50	0.88	4.73	0.87	*
発信力	19. グループでの取り組みで、メンバーに情報を分かりやすく伝えている	4.22	0.85	4.73	0.84	***
	20. メンバーがどのような情報を求めているかを理解して伝えている	4.42	0.78	4.72	0.86	**
	21. 話そうとすることを、自分なりに理解したうえでメンバーに伝えている	4.45	0.83	4.77	0.82	**
傾聴力	22. 内容の確認や質問等を行いながら、メンバーの意見を理解している	4.42	0.81	4.82	0.82	***
	23. あいづちや共感等により、メンバーに話しやすい状況を作っている	4.68	0.75	4.84	0.82	n.s.
	24. 先入観や思い込みをせずに、メンバーの話を聞いている	4.50	0.78	4.86	0.89	**
柔軟性	25. 自分の意見を持ちながら、メンバーの意見も共感を持って受け入れている	4.74	0.74	4.90	0.78	n.s.
	26. なぜそのように考えるのか、メンバーの気持ちになって理解している	4.63	0.84	4.78	0.91	n.s.
	27. 立場の異なるメンバーの背景や事情を理解している	4.43	0.86	4.71	0.96	**
情報把握力	28. 周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動している	4.41	0.84	4.76	0.85	***
	29. 自分にできること・他のメンバーができることを判断して行動している	4.52	0.81	4.80	0.88	***
	30. 周囲の人間関係や忙しさを把握し、状況に応じた配慮した行動をとっている	4.69	0.72	4.92	0.79	*
規律性	31. メンバーに迷惑をかけないように、ルールや約束・マナーを理解している	5.21	0.78	5.08	0.88	n.s.
	32. メンバーに迷惑をかけたとき、適切な事後の対応をしている	4.85	0.74	4.99	0.75	n.s.
	33. 規則や礼儀が求められる場面では、礼節を守ったふるまいをしている	5.08	0.76	5.10	0.84	n.s.
ストレスコントロール	34. グループでの取り組みでストレスを感じる時、その原因について考えている	4.23	0.96	4.58	0.94	***
	35. 人に相談したり、支援をうけたりして、ストレスを緩和している	4.47	0.91	4.64	0.93	n.s.
	36. ストレスを感じても、考え方を切り替え、コントロールしている	4.39	0.91	4.85	0.82	***

*:<0.05 **:<0.01 ***:<0.001

基礎力は多様な人々と協働していくために必要な能力であり、青木ら（2012）が指摘したように、新たな人間関係を構築していく中でより高められるものといえる。本研究では、学生同士ならびに引率教員との交友関係がほとんどなく、新たな環境で心理的な負荷が大きかったことが影響していると推察される。

一方で、「実行力」や「規律性」はすべての項目において有意な差が認められなかった。この理由として、事前調査の時点でこれら項目のスコアが高かったことが挙げられる。本研究と同じ質問項目を使用した林ら（2020）の結果では、「実行力」が実習前で12.42±2.44、実習後で14.48±2.4であったのに対して、本研究では事前調査で14.71±0.85、事後調査で14.95±0.85と事前調査時点で先行研究のキャンプ実習後と同等の値であった。「規律性」についても、事前

調査の時点で15.15±0.76と既に高い能力を有していたと考えられる。

本研究の対象者は、体育系大学の学生であり、ほぼ全員が幼少期よりスポーツ活動の経験を有し、本学入学後も体育会に所属して活動している。これまで大学生を対象に、運動経験と社会的スキル関係について検討した先行研究では、社会的スキルの獲得に運動経験が有効であるという結果を示している（杉山、2004；島本ら、2009）。また、体育実技において社会人基礎力が向上する（石道ら、2016；引原ら、2016）との報告もあることから、本研究の対象者がこれまでに行ってきたスポーツ活動により、既に高い能力を有していた可能性があるといえる。このことは、事前調査においてすべての項目において6段階中4を超えていたことの説明にもなるだろう。

一方で、本研究では天井効果や質問項目の信頼性については検討していないことが本研究の課題と言える。今後、対照群を設けて検討するなど、より適切な教育効果の評価に努めるとともに、評価を基にした教育プログラムの改良を実施していくことで、さらに充実したキャンプ実習になるものと考えられる。

4. まとめ

本研究では、新入生オリエンテーション内で実施した1泊2日のキャンプ実習が社会人基礎力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。本研究の結果から、入学時点で高い社会人基礎力を有している学生においても、心理的負荷の高い状況であれば短期間のキャンプ実習でも社会人基礎力を向上させることがわかった。

引用参考文献一覧

- ①青木康太郎・粥川道子・杉岡品子 (2012) 「キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』 3, 27-39.
- ②経済産業省 (2006) <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (参照日2024年8月28日)
- ③一宮厚・馬場園明・福盛英明・峰松修 (2003) 「大学新入生の精神状態の変化－最近14年間の質問票による調査の結果から－」『精神医学』 45 (9), 959-966.
- ④石道峰典・西脇雅人・中村友浩 (2016) 「体育実技授業における社会人基礎力育成を意図した介入効果の検証」『大学体育学』 13, 26-34.
- ⑤引原有輝・森田啓・若林斉・金田晃一 (2016) 「実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響」『大学体育学』 13, 16-25.
- ⑥大対香奈子・堀田美保・本岡寛子・直井愛里 (2018) 「大学生の社会人基礎力測定尺度の開発」『近畿大学総合社会学部紀要』 7 (1), 51-59.
- ⑦北島洋子・細田泰子・星和美 (2011) 「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」『大阪府立大学看護学部紀要』 17 (1), 13-23.
- ⑧杉山佳生・渋谷宗行・西田保・伊藤豊彦・佐々木万丈・磯貝浩久 (2008) 「学校体育授業を通じたライフスキル教育の現状と展望」『健康科学』 30, 1-9.
- ⑨島本好平・石井源信 (2009) 「体育授業におけるスポーツ経験がライフスキルの獲得に与える影響－運動部所属の有無からの検討－」『スポーツ心理学研究』 36, 127-136.
- ⑩築山泰典・神野賢治・田中忠道 (2008) 「大学キャンプ実習が『社会人基礎力』に及ぼす有効性の検討」『福岡大学スポーツ科学研究』 39 (1), 13-26.
- ⑪徳田真彦・粥川道子・安原政志・佐藤悦子 (2017) 「自然体験活動が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』 第8巻, 127-139.
- ⑫林直也・佐藤博信・溝畑潤 (2020) 「キャンプ実習が大学生のコミュニケーションスキル及び社会人基礎力に及ぼす効果に関する研究」『Human Welfare』 12 (1), 103-118.